建築豆知識

今回はお正月にちなんで、皆さんもよくご存知の神社に建つ「鳥居（とりい）」についてお話しします。

まず鳥居とは、神社などにおいて神域と人間が住む俗界を区画するもの（結界）であり、神域への入口を示すもので、一種の「門」である。

起源については諸説あり、確かなことは分かっていないが、単に木と木を縄で結んだものが鳥居の起こりであると考えられる。

文献によれば奈良時代から神社建築の門の一種とし、8 世紀頃に現在の形が確立されたとしている。

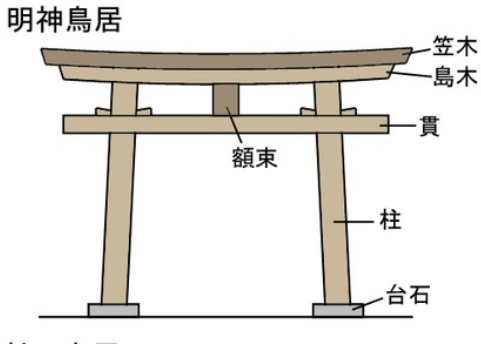
天照大御神（あまてらすおおみかみ）を天岩戸から誘い出すために鳴かせた鶏に因み、神前に鶏の止まり木を置いたことが起源であるとする説や、遠く中国・朝鮮半島などの海外に起源を求める説もある。

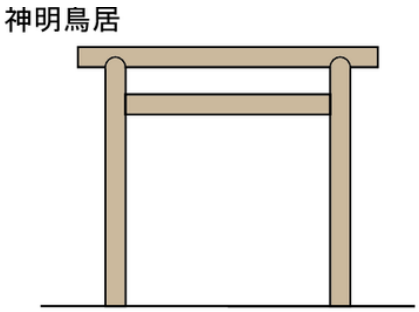
又、語源についても不明であるが、鶏の止まり木を意味する「鶏居」説や、「とおりいる（通り入る）」が転じたとする借字説もある。

構造そのものに着目した説としては建築用語として高欄の横木の最上部のものを鳥居桁と呼び、障子の上桁の横木を鴨居と呼ぶのと同じで、「トリイ」とは古来からの建築用語として存在し、平安初めに一般神社門は「トリイ」と俗称されるようになったとする。

このように起源や語源は定かではないが構造や材料も様々で、どこにはどの鳥居という確固たる決まりはなさそうだ。

ただ、鳥居は神明鳥居（下図左）と明神鳥居（下図右）に大きく別れ、神明鳥居は素朴な形式で全体的に直線的である。





柱や笠木は丸材、貫には板材が用いられることが多い。

笠木の下に島木がなく、貫は貫通せず、柱は地面に対し垂直に立てられている。

伊勢鳥居とも言うように、伊勢神宮において現れたと考えられている。

明神鳥居は笠木の下に島木があって反りが加えられている。

柱は地面に対して少し転びをつけて建てられている。

上記の大別から更に何十種類にも分かれている。

その上材料も現在では木材・石・銅・鉄・鉄筋コンクリート・ジュラルミン・塩化ビニールなど多種多様である。

数え方は「1 基・2 基‥‥」と数え、一般にひとつの参道に複数の鳥居がある場合は一番外側から「一の鳥居・二の鳥居‥‥」と呼ぶ。

最後に稲荷神社などの鳥居が朱色であるのは、古来その色が生命の躍動を表し、災いを防ぐとして神殿などに多く使われたためで、これが鳥居にも影響しているとされる。

皆さんも神社へ行かれたら鳥居にも関心を持って参拝してみて下さい。